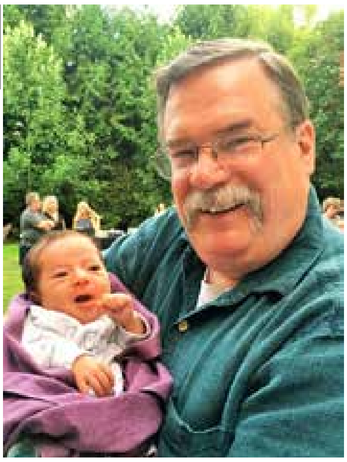
白馬セミナー来日記念特別寄稿 Part2



# 親としての責任に立ち返る

## グレッグ・ハリス

多くの人々が教育の問題を真剣に取り上げるようになってから、かなり時が経ちました。私たちは公教育にきちんと税金を投じ続け、公立学校がうまく機能していると考えていたのです。しかしそれは良かったことまでも、あっという間に変えてしまいました。

先進国における教育システムが完全に崩壊してしまったというわけではありません。事実、ある程度の成功は収めてきました。しかし、成功と言っても、その多くは間違いだらけの分野における成功だったのです。つまり、読み書きのできない大勢の大人たちを抱えた国家を作り出すことに成功し、若者の道徳的基盤を壊すことに成功したのです。そして、親たちの権威を巧妙に失わせることに成功しました。自由市場システムへの多くの信頼が失われ、アメリカは、1987 年に発表されたレーガン大統領の教育に関する報告書にあるように、「危機に立つ国家」になってしまったのです。

明らかに、このような教育システムの「成功」は、アメリカの公立学校が始まって以来、教育者たちが描き、私たちに約束してきた成功とはまったく反対の結果を示しています。19 世紀中頃、ホレス・マンは、公教育は人類最大の発見であり、地域の学校は最終的に「黄金時代」を導く場所になるであろうと語りました。20 世紀初頭、ジョン・デューイは、アメリカの教育が偉大な「社会主義者のユートピア」を作るために用いられるだろうと主張しました。ところが、論より証拠です。ジョニーは読めず、スージーは単語のスペルが分かりません。ウィリーは書けず、アーサーは足し算ができません。この 4 人の若者全員が、乱交、反抗、薬物乱用、不安定、暴力という恐ろしい蜘蛛の巣にかかってしまったのです。最も公立学校に頼らなければならないこれらの側面が、ますます悪くなる一方です。

日本では、「幼少期」という「近代の」概念は、西洋との関わりの一つとして 1850 年以降に現れたものです（ウィキペディアより）。当時、アメリカおよび他の国々に浸透していった国家主義、および軍国主義的な目標を持つプロイセン公教育を取り入れたのです。明治時代の指導者たちは、子どもを含む個々人を、国家に仕えるために動員することが、国民国家の最重要課題であると判断しました。

このプロイセン公教育をモデルにした西洋式教育が、その目標達成に不可欠なものとして導入されたわけです。そして 1890 年までに、日本には、国家の掲げるこの教育プロジェクトを心から歓迎し支援する政治家、官僚、軍人、学者、教師、ジャーナリスト、良く教育された親たちの数が増大します。彼らは上流中級階級に、幼少期のあるべき姿と、子どもの義務は宿題に膨大な時間を割くことであると教えました。このような考えは、愛国心と共に、あらゆる社会階級に急速に広まり、この

愛国心が、来たる日露戦争、その後に起こる致命的な結果をもたらしたアメリカとの戦争に必要とされる兵士たちを供給することにつながります。

第二次世界大戦がもたらした荒廃に次いで、連合軍の占領政府は、当時の日本にあった軍国主義的教えを根絶し、日本を「民主化する」ことを目的として、最重要課題の一つとしての教育再建を打ち出しました。しかしながら、アメリカの教育システムをモデルにして再建された新しい教育システムは、プロイセン公教育の方策と同じように、国家に益となる人材を生み出すというもので、その根底にある親たちへの裏切りには何ら変わりもありませんでした。

戦後に実施された学校改革は、入試の負担を軽くし、生涯学習をサポートすることを目指していましたが、公教育システム、一律化された学習要項の圧力によって、好奇心は殺され、国家の関心ごとに適合する者が育てられてきました。それゆえ、文部科学省が日本における教育行政の責任を担い続ける限り、子どもたちの教育は、本当の意味で、個々の子どもたちやその子どもの家族の利益のためにはなりません。それよりも、国家の利益のため、また、国家の制度を支える日本政府、法人、経済産業などの利益のためになるのです。

もし子どもたちが、詩篇 127 篇 3 節の中で「主の賜物」だと主張されているように、主と主の栄光のために訓練し育てるようにと親に託されている存在であるなら、一時的な恩恵にあずかれるとしても、日本国家の公教育は拒否されなければなりません。もし子どもたちが数学や科学の実力テストで高得点をとったとして、そうすることで、無神論やティーンエイジャーの疎外感を生み、職場での自殺などによって子どもたちの魂が奪われるなら、私たちにとって何の得となるでしょうか。公教育に携わる教育者たちは、過去 150 年の間、自分たちのすばらしさを証明するチャンスを持っていました。しかし、最も大切なテストに失敗したのです。彼らの「成功」は、子どもたちの将来を殺しているのです。

これらの破壊的な「成功」に応えて、世界中の何百万という親たちは、実践的な他の選択肢を見出しました。自分の子どもたちを、もう学校に行かせないことにしたのです。と言っても、ただ学校に行かなくなっただけで、家庭において、その両親たちによって教育を受け続けています。

このようなことは、まったく他人事に思える人もいるかもしれません。家で教育する？あなた自身がホームスクーラーとして育っていなかったなら、そういう人たちに対していろいろな疑問を投げかけることでしょう。子どもたちは本当に学習しているのか？両親たちには本当に教える資格があるのか？そういう人たちって、一部の宗教的熱狂者ではないのか？なぜ、ホームスクーラーたちの地位が急激に上がったのか？親たちはどうしてそんなに多くの時間を自分の子どもたちと過ごしたがるのか？そもそも法律的にはどうなのか？社会性はどうなのか？子どもたちが変わり者として、あるいはもっと悪く成長するのではないか？

あなたの近所でホームスクーリングをしている家庭があるなら、たぶんあなたはその家庭の中でどんなことが起こっているかいろいろ考えることでしょう。直接彼らに聞いてみたらどうですか？きっと、うれしい驚きを味わうことでしょう。また、どうぞ、来る白馬セミナーに参加してみてください。

これまで私はホームスクーリングに関して考えられる限りの反対意見を聞いてきました。そして、反対意見の一つ一つに対して、素晴らしい回答が用意できています。今回の白馬セミナーにおいて、用意された回答のうちいくつかを、実践的で分かりやすい方法でお伝えしようと思っています。

大切なポイントは、ほとんどのホームスクー

ラーの親たちは、教育の原点、ホームスクーリングに立ち返ったクリスチャンであって、自分たちの子どもを自分たちで教育するという神から与えられた責任に、真剣に取り組んでいるということです。

私が注意深く選んだ二つの言葉、「立ち返る」と「責任」に注目してください。

親たちは、ホームスクーリングに「立ち返って」いるのです。ホームスクーリングを実践することは、何も新しいことではありません。アメリカの文化でもそうですし、日本などの世界中の国々においても新しいことではないのです。これは子どもたちを教育する方法として、最も古く、昔ながらのやり方であり、一方、公教育こそ新しい考え方なのです。アメリカでは 180 年前の 1837 年に、税金を投入した新しい試みとして始まった公教育は、全くもって前例のないものであり、今もその効果が証明されないままです。初期の頃になされた教育学者たちの警告は、すべて現実のものとなりました。税制の改革が継続的になされ、税収が拡大していなければ、公教育の流れはとうの昔に終わっていたことでしょう。

ホームスクーリングは、単に、先進国を成長させてきた教育システムに立ち返ったにすぎません。それは家庭にあって親が教育を行うというシステムに立ち返るものです。この方法によって、アメリカ合衆国は、ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン、ロバート・E・リー、オリバー・ウェンデル・ホルムズ、セオドア・ルーズベルト、ブッカー・T・ワシントン、ハリー・トルーマンらを輩出してきたのです。

しかし、現代のホームスクーリングが単に昔を懐かしがっているのではないことを理解してください。伝統を重んじるために、単に過去の伝統に立ち返ろうとしているわけでもありません。ホームスクール・ムーブメントは、古い方法ながら、質の高い教育を施すために、最新のテクノロジーを駆使しているのです。ほとんどのホームスクーリングをする親たちは、子どもの教育を監督するという神から与えられた責任に、真剣に取り組んでいます。短い期間ですが、子どもたちを教育するという厳かな努めが自分たち親に任せられたということを知っています。そして、親たちは最大限の努力を払わなければなりません。子どもたちを「主の教育と訓戒によって」（エペソ人への手紙 6:4）育てなければならないのです。実際のところ、単に子どもたちの教育を監督する権利をもっているというだけでなく、義務を負っているということです。

たぶん、あなたはこれらのことすべてをすでにご存じでしょう。また、自分の子どもをホームスクーリングすることを既に決めておられるかもしれません。今回のセミナーは、あなたが、さらに、聖書が教える方向で進む上での励みとなり、どのように始め、どのように深めていくか、高嶺を目指していくかを教えてくれ、踏み出した時点であなたに正しい方向を示してくれるでしょう。そして、多くの疑問に回答を与えてくれることでしょう。

一方、自分の子どもをホームスクーリングするつもりはまだないけれども、ホームスクーリングをしている人たちに対しては関心を持っている人もおられると思います。あなたは、ホームスクーリングを行っているクリスチャン家族がどのような家族であるかをもっと知りたいと思っている牧師、弁護士、公立学校の管理職、教師、あるいは祖父母かもしれません。そのような皆さん方も、ぜひセミナーに参加してください。今日世界中で、最もエキサイティングで急成長しているクリスチャンの教育ムーブメントがホームスクーリングである理由を発見してください。そして、それをより良いものにしていくために力を貸してください。